

森林が守る奄美の自然

加計呂麻島で計画された大規模な森林伐採計画に続き、奄美市住用町を拠点にした奄美大島の森林に決定的なダメージを与えかねない伐採計画がもちあがり、島の内外で憂慮する声があがっているとき、伊集院忠三郎氏の「森林管理と保全について」（7月19日、南海日日）を読んで、奄美の森が本土の森林（とりわけ人工林）と画一的にとらえられることを危惧しました。

◇ 奄美の森の特性は、亜熱帯気候と年間3000ミリの雨がもたらす「多様な生態系」にあります。多くの生き物たちが複雑に係わり合い、微妙なバランスを保ちつつ特徴ある生態系を維持しており、とりわけ、特有の生物相を有し、固有の種または亜種に分化しているものが多いという点で世界的にも注目されていることにあります。奄美市議会に提出した「伐採計画を断念させる行政の対応を求めた請願書」（本会議で採択）に列記した、住用一帯の動物種だけでも87種（うち絶滅危惧種13種）を数える多さ。本土の人工林と奄美の森との大きな違いはこの「種の多様性」にあります。

遠い昔から多様な生態系を維持し、世界的にも注目されている奄美の自然が、たった半世紀の間に深刻なダメージを受け、鹿児島県の絶滅危惧のリストに絶滅危惧Ⅰ類だけでも植物139種、動物99種もあがっています。この深刻な事態を生んだ原因はいくつか考えられるが、かつてなされた森林の皆伐もその一つです。間伐も奄美の森では生態系にダメージを及ぼします。赤土に覆われた奄美で赤土が露出していないのは、林床に堆積した落ち葉、土壌に生息している小さな生き物たち（土壌動物や菌類）が肥沃な土壌をつくっているからです。

環境庁自然保護局は平成3年、南西諸島の種の保存に関する研究報告書の中で「天然林の伐採のみならず、樹木の育成の目的で亜高木層以下の樹木及び林床植物を除伐することが国の補助金を得て進められ、森林の樹齢構成を単層化させ、森林の多様性のもつ機能を著しく低下させている。天然更新、遺伝子資源、水源涵養の上からも好ましいことではない」と述べ、本土の人工林と同様に扱ってはならないことを指摘しています。

◇ 奄美の先人は、人間は自然に生かされていると認識し、自然界への畏敬の念を日々の暮らしの中に取り入れてきました。アンマやフッシュは、子や孫に「木一本伐るのもよく考えるんだよ」、「物事は七代先まで考えるんだよ」、「小さな貝は海に帰してきなさい。採りすぎるんじゃないよ」と諭しました。先人たちは、森、川、海（イノー）の恵みを立体的に水の循環で結び、生態系を持続させてきました。奄美の先人が今を生きる私たちに残した「水は山おかげ 人^{ちゅ}や世間おかげ」に込められた奥の深い自然観を、みんなして今一度かみしめたいものです。

計り知れない貴重な奄美の「財」・人類の「宝」を、一時のわずかな雇用のために失うようなことだけは絶対に避けなくてはなりません。

◇ 近年、地域の振興策の一環として観光事業が話題にあがっていますが、奄美の自然が壊され「沈黙の島」になったときの危険性も話題にしなければならないことが残念でなりません。痛めつけられながらも残っている奄美固有の自然、多様な生き物たちが織りなす生態系のにぎわい、先人の生態系への持続可能な係わり方、そこから生まれた豊かな文化を語るとき、「持続」する観光事業で賑わうことになるでしょう。

◇ 加計呂麻島での大規模な伐採計画が持ち上がったとき、期を置かず島の圧倒的多数の住民が反対に立ち上がりました。住用町山間での伐採計画も反対の声が各地から起こり、島の自然を大事にする機運はいままでにない盛り上がりです。本土の各地からも郷土出身者をはじめ奄美に魅せられた方々から多くの声が寄せられ、2万9千人もの署名も届いています。環境、観光関連の団体が大連合して加計呂麻島・住用町山間での伐採計画を阻止する組織も結成されました。

近年、「自然は最大の公共財」という概念が広がっています。個別の動産・不動産に対する近代的所有権が、自然そのものまでを支配してよいのかを議論する状況も生まれています。

菌 博明（NPO法人 環境ネットワーク奄美）